

日本語における“[数詞+X]”の数詞数量詞性

北原博雄

要 約

日本語では、「2つの／800グラムの」林檎のように下線部の数詞数量詞を用いるときは、数詞（「2」）に助数詞（「つ」、「グラム」）を直接付着させなければならないが、英語では、*two apples*のように可算名詞の指示対象を数える場合は数詞だけが用いられる。日本語にも、「2議員、3委員、4県、7大学」などのように、英語の可算名詞句と同様、助数詞を伴わずに、数詞の直後にある「可算名詞」の指示対象を数えているように見える例がある。このような例が英語の可算名詞句と同じかどうかを議論する準備段階として、本論文では、「2議員、4県、7大学」などが数詞数量詞であるか否かを定める条件を提案する。

キーワード：数詞数量詞、助数詞、類別-計数詞、計測詞、可算名詞、不可算名詞、プロトタイプ

1. はじめに

日本語には、事物の数量を表す言語形式の1つに、次に挙げるような数詞数量詞 (numeral quantifiers : 以下NQと略す) がある。

- (1) 2冊, 3本, 4メートル, 5リットル, 6回, 7分(間), ……

日本語のNQは、数詞と助数詞から構成され、後者が前者の直後に置かれる。例えば「2冊」と「4メートル」はそれぞれ、「2」、「4」が数詞であり、「冊」、「メートル」が助数詞である。

(1) が示すように、日本語では、数詞を用いる場合には助数詞の使用が義務的である¹⁾。日本に近いところでは中国語、韓国語もそのような言語であり、Aikhenvald (2003 : 101) によれば、東アジア、東南アジア、中央アメリカなどの言語もそうである²⁾。一方、数詞だけで数量を表せる言語もある。英語の例を見よう。(2) - (4) のbは、aの英語の文に意味的に対応する日本語の文である³⁾。

- (2) a. Mutter bought two books.
 b. 睦美は 2冊の本を / 本2冊を / 本を2冊 買った。
- (3) a. John drank two liters of water.
 b. 稯司は 2リットルの水 / 水2リットルを / 水を2リットル 飲んだ。
- (4) a. Tom carried two boxes of water.
 b. 富雄は 2箱の水 / 水2箱を / 水を2箱 運んだ。

英語では、可算名詞 (countable noun) の指示対象を数えるには (2a) の下線部のように数詞だけが使われるが、不可算名詞 (uncountable noun) の指示対象の数量を表す場合は、(3a) や (4a) の下線部のように、数詞に *liters* や *boxes* のような日本語の助数詞に相当する語を後続させなければならない。したがって、助数詞 (的な要素) の使用の有無についての日本語と英語の違いは、(2)、つまり、英語で可算名詞の指示対象の数量を表す場合に助数詞的な要素が現れないという点にある。

しかし、日本語でも、助数詞を伴わずに数詞だけで「可算名詞」の指示対象を数えているように見える例がある。

- (5) a. 2議員, 3委員, 4県, 5種類, 7大学, ……
 b. 楽天市場の2億商品の中からおすすめの商品をご紹介します。(2018.12月～.電車内広告など)

「可算名詞」と括弧を付けたのは、日本語の名詞の中に可算名詞が存在するかどうかは考えなければならない問題だからである。たとえば、英語の可算名詞には (2a) の *books* のように、単数形の *book* と形態的に対立する複数形があるが、それらと意味的に対応する日本語の「本」は単数としても複数としても解釈できる。「書籍」や「図書」では複数の解釈が優先的であるかもしれない。一方で、有生名詞、特に人間を表す普通名詞には、「学生たち」「学生ら」「学生ども」のように複数を表す接尾辞が後接する。これらの下線部を複数形接辞とする研究者もいるが、これらの接尾辞は、有生名詞以外の大多数の普通名詞に後接しないし、「太郎たち」「聡子と美保子ら」「私ども」のように、固有名詞や、固有名詞を等位接続した句全体に付いたり、代名詞 (的な名詞) にも付いたりする点で、英語の複数形接尾辞とはかなり性質が異なる。また、Allan (1977) や Krifka (1995), Chierchia (1998) などのように、日本語のような助数詞 (的な要素)⁴⁾ をもつ言語には、可算名詞がなく、不可算名詞あるいは質量名詞 (mass noun) しかないという研究者もいる。

したがって、(5) に挙げた例が、英語の (2a) の *two books* と同様の可算名詞句であるかどうかは、日本語に可算名詞があると論証した後でなければ議論することができないことになる。そこで本論文では、(5) のような例の分析の第1歩として、それらがNQであるかどうかとい

うことを考える。(5)の例がNQだということになれば、それが可算名詞句であるかどうかという問いをたてること自体が無意味になる。本論文では、まず、2節で北原(1996, 1999)によるNQの分類と助数詞の分類を概観する。次に3節で、(5)のような例についての観察・記述の最初のものである成田(1991)を検討しながらNQを定義する。最後に4節で、3節で問題となった言語現象を取り上げ、本論文でのNQの定義がそれらを正しく説明することを見る。

2. 数詞数量詞 (NQ) の二分と助数詞の二分

次に挙げる例の「みかん」のように、NQによって数量が示される事物を表す名詞を被計量詞 (quantified noun) と言おう。

- (6) a. みかんを {40個 / 8キログラム} 買った。
 b. {40個のみかんを / 8キログラムのみかんを} 買った。

NQには、「5キロメートル泳ぐ」や「これまで5回渡韓した」のように被計量詞を必要としないものもある。また、「40個買った」のように被計量詞と共起するNQも被計量詞と共起しないことがあるが、その場合でも、必ず被計量詞が文脈から復元されて解釈しうる。

被計量詞は、これまで先行詞と言われてきたものであり、筆者もそうやってきた。しかし、(6b)では、「みかん」がNQに先行しておらず、また、「みかん」を先行詞と言うと、(6b)は、(6a)のNQが「みかんを」の前に移動して派生されたかのような印象も与えるため改称する⁵⁾。本論文では、被計量詞をとるNQを観察対象とする。

NQは様々な位置に現れるが、中でもよく議論されるのが(6a, b)の位置に現れるタイプである。北原(1994, 1996, 1999)では、(6a)のNQは、述部に限定された被計量詞の指示対象の数量を表すのに対し、(6b)のNQは被計量詞の指示対象の数量を表すと述べた。すなわち、NQは、(6a)では「買ったみかん」の数量を表し、(6b)では「みかん」の数量を表すということである。このような解釈の違いは、(6a)のNQは、修飾対象である「買う」を経由してその項である「みかん」の数量を表す(矢澤1985)のに対し、(6b)のNQは「の」を介して「みかん」を修飾しているという統語的な理由による。

(6)に挙げた「40個」と「8キログラム」は異種の解釈を受ける。(6a)でも(6b)でも、計量対象(=被計量詞の指示対象)である「(買った)みかん」について、「40個」は1個ずつ個別的、離散的に計量しているのに対し、「8キログラム」はひとまとまりとしてまるごと計量している。北原(1996, 1999)では、「40個」のように計量対象を個別的、離散的に計量するNQを個体数量詞と言い、「8キログラム」のようにそれを一括計量するNQを内容数量詞と言った。本論文でもこの二分を仮定する。以下、個体数量詞の計量方法を計数(counting)と言い⁶⁾、内容数量詞の計量方法を計測(measurement)と言おう。用語上、計量の下位例が計

数と計測ということになる。

以上のような個体数量詞と内容数量詞の計量方法の違いは、それらを構成する助数詞の違いから説明することができる (Kitahara2018)。北原 (1996, 1999) では、内容数量詞を構成する助数詞を単位系助数詞と言った。例えば長さを計測するNQを構成する助数詞は、「20センチメートル=200ミリメートル=0.0002キロメートル」の「センチメートル」、「ミリメートル」、「キロメートル」や、「1間=6尺=1.8182メートル」の「間」、「尺」、「メートル」のように、数詞をかえると体系的に置き換えられる、あるいは逆に、助数詞をかえると体系的に数詞が置き換えられる。このように、内容数量詞を構成する助数詞は単位としての体系をもつのである。本論文では、単位系助数詞を計測詞 (measurer) と改称する。内容数量詞の計量方法を計測と名づけたためである。

一方、個体数量詞を構成する助数詞を北原 (1996, 1999) では非単位系助数詞と言った。それらは計測詞のような体系的な置き換えができないからである。これらは、たとえば「冊」なら書物状のモノを計数する場合に、「人」なら人間を計数する場合に使用が限られるというように、計量対象を類別する (classify)。非単位系助数詞という用語は、単位系ではない助数詞という消極的な意味しかないため、類別-計数詞 (classifier-counter) と改称する。この用語には、同定可能な個体を類別して計数するという意味がある。計測詞は、類別-計数詞ほど類別機能が強くない (Kitahara 2018)。

本論文では、助数詞の下位類として、類別-計数詞と計測詞を仮定する⁷⁾。

3. 数詞数量詞 (NQ) の定義

(1) と (5) をそれぞれ (7a), (7b, c) として再掲する。

- (7) a. 2冊, 3本, 4メートル, 5リットル, 6回, 7分 (間), ……
 b. 2議員, 3委員, 4県, 5種類, 7大学, ……
 c. 楽天市場の2億商品の中からおすすめの商品をご紹介します

(7b, c) の下線部は単独で名詞としても使えるが, (7a) のそれはそうできないかそうしにくい。

- (8) a. * {冊を / メートルを} 買った
 b. * 君が選んだ {冊 / リットル}⁸⁾
 c. 商品を買った
 d. 君が選んだ {商品 / 議員 / 大学}

管見の限り, (7b, c) のような例についての最初の研究は成田 (1990) である。本節では彼の

議論を検討し、NQを定義する。

なお、例文の先頭にあるマークは、何もない場合は適格であることを示し、?、??、*?の順に適格性が低くなり、*は不適格であることを示す。先行文献から引用した例文の判定は、その文献の筆者によるものを挙げた。

成田(1990:2)は、(7b,c)の下線部のように「名詞と同形で数詞に後接して用いられるもの」を「名詞と同形の助数詞」と言う。まず、彼の挙げるリストを見よう⁹⁾。(9)では「おおむね、和語はひらがな、漢語は漢字、外来語はカタカナで示し」ている(同)。

(9) A. 分類項目・構成要素 (単位的なもの)

- a. 空間を表すもの: 都道府県, 県, 郡, 市町村, 市, 町, 区, 選挙区, 集落, 町内, 地方, 地域, 区域, 区画, 工業地帯, 地点, 会場, 部屋, 教室
- b. 組織ないし集団¹⁰⁾: 大学, 病院, 百貨店, デパート, 画廊, 書店/学部, 学科, 学年, 学級, クラス, グループ, ブロック, チーム, 班, 委員会, 部族, 家族/連隊, 部隊, 小隊/部, 課
- c. 抽象的な分類項目: 系統, 系列, 分野, 種類, 要素
- d. 様々な分野の構成要素: 単位, 教科, 科目, 路線, 海路, 場面, コース, レーン, チャンネル, バンド [周波数帯域のこと], レース, 機能, 番組, 車線
- e. 言語の単位: 章, 節, 項, 文, 段落, 行, 句, 文字, 字, 画, 音節
- f. 算数科の図形についての用語: 図形, 直線, 辺, 角(かく), 点
- g. 時間を表すもの: 学期

B. 役職役割

- a. 組織の構成員: 委員, 教授, 先生, 部長, 課長, 係長, 大臣, 議員, 長老, 審判
- b. 美人, 奇人, 名人

C. 容器

- a. さら, はこ, たる, ふくろ, 缶(かん), 瓶(びん), パック, ケース
- b. くし(串), はち(鉢) [植木など]

D. その他

- a. しな(品), め(目) [編み物などで], 曲, 票(ひょう)
- b. かけら, つぶ, たば

本節では、(9)はA・BとC・Dに二分されることを明らかにする。以下、助数詞、及び、(9)に挙げたような「名詞と同形の助数詞」を“X”と表記し、その直前に数詞が付着したものを“[数詞+X]”と表記する。

3.1 数詞数量詞 (NQ) の計量対象

(9A, B) の例がXである [数詞+X] の数詞は, 常にXの指示対象を計数する解釈を受ける。

(10) 6地域, 5百貨店, 4学科, 3部隊, 2分野, 7コース, 8(文)字, 3辺, ……

たとえば「6地域」は, 「6」が「地域」の個体数を表している。次に, (9C, Db) の例がXである [数詞+X] について, 成田 (1991:5) は「もともと数えられるあるいは測られるものが別にある」と言う。これは, 次に挙げる (11) - (13) のbとb' の適格性から言えることである。たとえば (11b, b') の「2さら」は, 「さら」以外の計量対象, すなわち, この例では「寿司」の数量を示している。

(11) (9Ca)

- a. *皿が2さらある (成田1990:3一部修正)
- a'. *2さらの皿がある (同)
- b. 寿司が2さらある (成田1990:5一部修正)
- b'. 2さらの寿司がある (同)
- c. 寿司の皿が2さらある (成田1990:5一部修正)
- c'. *2さらの寿司の皿がある

(12) (9Cb)

- a. ? *串を3串買う
- a'. *3串の串を買う
- b. 葱鮪を3串注文する
- b'. 3串の葱鮪を注文する
- c. ?? 竹製の串を3串買う
- c'. *3串の竹製の串を注文する

(13) (9Db)

- a. ??粒が2粒落ちた
- a'. ??2粒の粒が落ちた
- b. 白米が2粒落ちた
- b'. 2粒の白米が落ちた
- c. 何かのつぶが, 2粒落ちた (成田1990:3一部修正)
- c'. *2粒の何かの粒が落ちた

(11) - (13) から, NQを構成する助数詞と, NQの被計量詞との間には次に挙げる条件が成立すると言えそうである。

(14) NQを構成する助数詞とNQの被計量詞は同じ形態ではないのが一般的である

直観的にすぐに助数詞と言える例, 類別-計数詞であれば「冊」や「匹」, 「本」, 計測詞な

ら「メートル」や「グラム」, 「cc」などは, それらと完全に同じ形態の被計量詞をとることは決していない。(11)–(13)における, $a \cdot a'$ の不適格性と $b \cdot b'$ の適格性, 及び, (14) から, (11)–(13) では, Xが助数詞であり, したがって [数詞+X] はNQである可能性があるということになる。さらに, (11)–(13) の a と a' の不適格性は, 「皿」「串」「粒」を計数する場合の助数詞はそれぞれ, 「枚」, 「本」, 「個」・「つ」が一般的であることにもよる。

(11c) と (13c) が適格であるのは, 被計量詞がそれぞれ, 「寿司の皿」「何かの粒」のように, 句の主要部 (head) がXと同形態であっても修飾句があるためであり, (14) を満たしているからである。被計量詞に修飾句がある分, 被計量詞の指示対象はXの指示対象よりも具体的である, あるいは, 被計量詞の指示対象の集合はXの指示対象の集合の部分集合を成すということである。(11c) と (13c) のように, 被計量詞の主要部名詞がXと同形態である場合は, 被計量詞の指示対象の集合がXのその部分集合になると言うことができそうだ。

(11c) と (13c) に比べて, (12c) は適格性が落ちる。成田は, (9C) の a と b の違いは, b が「容器とはいいいにくい」と述べているだけである。(9Cb) に挙げられている「はち (鉢)」ならば, 「笠間焼きの鉢を5はち買った」という適格な例がつけられるため, (11c)・(13c) と (12c) との間の適格性の違いは, 助数詞らしさが個々の例によって異なることによると言うことができる。いわゆる語彙レベルの特異性 (idiosyncrasy) である。名詞から助数詞に変化するというルートがあるとすれば, これは, 名詞が助数詞化されている度合いの違い, と言うこともできる。残った問題は, (11) と (13) (そして (12)) における c と c' の間の適格性の違いが何によるかである。これについては4節で論ずる。

ここまで論じたことをまとめておこう。

(15) [数詞+X] は,

- (i) Xが (9A, B) の例であるときは, 数詞がXの指示対象を計数する解釈を受ける
- (ii) Xが (9C, Db) の例であるときは, 被計量詞の指示対象, したがって, Xの指示対象以外の事物を計数するとも¹¹⁾ 解釈される

(14) と (15) (ii) より, Xが (9C, Db) の例である [数詞+X] はNQである可能性が高く, したがって, Xは助数詞である可能性が高いとすることができる。

(9Da) の例からも (11)–(13) の b と b' のような例を作ることができる。

- (16) a. *曲を5曲演奏した a' . *5曲の曲を演奏した
 b. {ヴァイオリンコンチェルトを/ピアノ協奏曲を} 5曲演奏した
 b' . 5曲の {ヴァイオリンコンチェルトを/ピアノ協奏曲を} 演奏した

- c. ピアノの曲を5曲演奏した
 c'. *? 5曲のピアノの曲を演奏した
- (17) a. ? /*品を2しな届ける (成田1990: 5, (8a))
 a'. ? /*2しなの品を届ける (成田1990: 5, (6a))
- b. 娘にプレゼントを2しな送る
 b'. 娘に2しなのプレゼントを送る
- c. 注文の品を2しな届ける (成田1990: 5, (8b))
 c'. ? /*2しなの注文の品を届ける (成田1990: 5, (6a, b))

成田の例文判定は、適格、?, 不適格の3段階である。この3段階判定であれば筆者は、例文の先頭部のスラッシュの後ろに示したように (17a, a', c') を不適格と判定する。(17a, a') が不適格であるのは (14) に違反しているためである。(17c') の判定が*だとすると、(17) のcとc' の間の適格性の違いは、(11) と (13) におけるcとc' の間の適格性の違いと平行することになる。筆者の判定では、(15ii) のXには (9Da) の例も入ることになる。したがって、Xが (9C, D) の例である [数詞+X] はNQである可能性が高いとすることができる。

3.2 数詞数量詞 (NQ) の現れる統語文脈

成田 (1991: 3-4) は、NQは次に挙げるQの位置に現れると言う。

- (18) イ. Q+格助詞 (「3人が来た」)
 ロ. Q+の+被計量詞+格助詞 (「3人の学生が来た」)
 ハ. 被計量詞+Q+格助詞 (「学生3人が来た」)
 ニ. 被計量詞+格助詞+Q (「学生が3人来た」) (成田1990: 3-4, (2) 一部改変)

Qの位置は、(18イ)-(18ハ) では名詞も現れ、(18ニ) では副詞も現れる。1960年代後半から80年代にかけて行われた数量詞遊離 (quantifier floating) の議論では、(18ロ, ニ) の2タイプを議論するもの (神尾1977など) や、(18ロ)-(18ニ) の3タイプを議論するもの (奥津1969, 1983など) があった。本論文では、NQが (18ロ, ニ) のQの位置に現れるかどうかを観察する。筆者は、(18ハ) について、他の研究者よりも不適格性が高いと判定する場合が少なくないことも (18ハ) を外す理由の1つである。但し、先行研究で (18ハ) タイプの例文の判定を挙げている場合はそれも挙げる。

奥津 (1969, 1983) に倣い、(18ロ) の「3人の学生が(来た)」をQノNC型、(18ハ) の「学生3人が(来た)」をNCQ型、(18ニ) の「学生が3人(来た)」をNCQ型と呼ぼう。QはNQであり、Nは被計量詞である名詞、Cは格助詞である。先行研究では、NQの認定基準として

NCQ型の可否だけを扱うものもある（田中2012, 2014など）。その理由は、NCQ型のQの位置に現れるNQは純粹に数量を表すためだというものである。しかし、本論文のように、[数詞+X]がNQかどうかに関心がある場合、QノNC型のQの位置に現れることもNQの認定基準に入れなければならない。たとえば、奥津（1983）が属性Qと呼ぶ「5000ccの車」の「5000cc」も、本論文では1台の「車」を計測していることになるためNQだということになる。奥津も言うように、属性QはQノNC型にのみ現れ、それに対応すると見られるNCQ型は不適格になる。

(19) {5000ccの車／*車を5000cc} 購入した

奥津が属性Qとしたのは、(19)のように、適格なQノNC型に対してNCQ型が不適格になる例で、被計量詞の指示対象の数量ではなく、その性質や特徴などの属性を表すNQについてであった。属性Qは、[数詞+X]がNQであるかどうかを判定するために設定されたものではないのである。「5000cc」は明らかにNQである。本論文では、QノNC型とNCQ型のQの位置を占めることも、被計量詞をとるNQの性質だと考える¹²⁾。

(18イ)を観察対象から外すのは、これのQの位置に現れるのは名詞性があるということ以上の情報が得られないためである。

ではデータを見ていこう。まず、3.1では、(9C, D)がXである[数詞+X]はNQである可能性が高いと述べた。これは、(11)–(13)、(16)・(17)のbとb'が示すように、[数詞+X]がQノNC型でもNCQ型でも適格であることから言うことができる。

次に(9A)がXである[数詞+X]について、成田（1990:4, (3)–(5)）の観察を見よう。

- (20) a. *ことし、3大学の大学ができた
 b. *ことし、3大学の特色ある大学ができた
 c. *ことし、3大学の、そのようなところができた
- (21) a. *ことし、大学3大学ができた
 b. ?/*ことし、特色のある大学3大学ができた
 c. *ことし、そのようなところ3大学ができた
- (22) a. *ことし、大学が3大学できた
 b. ?ことし、特色のある大学が3大学できた
 c. ことし、そのようなところが3大学できた

3.1で述べたように成田の例文判定は3段階であるが、(21b)についての筆者の判定は、スラッシュの後ろに示したように不適格である。さらに成田（1990）は、(21c)に(22c)と同じ例文を挙げているが、(21)はNCQ型の例であるからこれは誤りである。例文を(21c)のよう

に修正し、筆者の判定も付しておいた。筆者の判定では、(20)のQノNC型と(21)のNCQ型はすべて不適格になる。NQは、(18口)－(18ニ)の3つの型に現れるため、(20)－(22)の9例の中で(22c)（と(22b)）しか適格にならないということは、「3大学」がNQとしてはかなり周縁的な例であることを示唆する。

成田(1990:5)は、(22c)の適格性について、「『大学』という名詞がないとかなり自然になる」と言う。(9C, D)がXである[数詞+X]で言えば、(11)－(13)、(16)・(17)のbとb'が、それぞれ、(22c)、(20c)に対応することになる。被計量詞とXが全く異なる形態であるとき、(9C, D)がXである場合はQノNC型、NCQ型ともに適格になるが、(9A)がXである場合はNCQ型しか適格にならないということである。この事実も、「3大学」がNQの周辺例であることを示す。

次に、(22b)のように、被計量詞の主要部が[数詞+X]のXと同じであってもそれが修飾されていれば適格性が上がるのであった。これは、(14)を満たすからである。しかし、(22b)は3段階判定の中間である?であり、この例に対応する(9C, D)の例である(11)－(13)、(16)・(17)のcは適格である。この適格性の違いも、[数詞+X]は、Xが(9C, D)の例である場合よりも(9A)の例である場合の方がNQらしくないことを示している。

さらに、NQであれば「みかんが {5つ / 2キログラム}」のように、名詞1語が被計量詞になりうる。(9C, D)がXである[数詞+X]では、(11)－(13)、(16)・(17)のbとb'がその例となる。しかし、「3大学」ではそうできない。「3大学」がNQだとするとその計量対象は、「大学」という名詞で指示しうるモノ、あるいは、「大学」の内包を満たすモノであるから、名詞1語で言えば「大学」が最も相応しい。しかし、これでは、(20)－(22)のaの不適格性が示すように(14)に違反する。(22b)が完全な不適格性を免れているのは「大学」を修飾する句があるためであり、それによって(14)を満たすからである。このように、「3大学」が被計量詞として名詞1語をとることは難しいのである。これは、「大学」を被計量詞とするNQの助数詞にはたとえば「校」があるということにもよる。

(23) 来年、{5校の大学が / 大学が5校} 新設される

[数詞+X]において、前述のように被計量詞（の主要部）とXの形態が同じか似ている場合、あるいは、それらの意味が同じか似ている場合、被計量詞の指示対象はXのそれよりも具体的であり、前者は後者の部分集合を成すと言えそうである。これは、(23)の「大学」と「校」の間にもみてとれる。「大学」が助数詞になりにくいのは、その意味が具体的すぎるということも理由の1つかもしれない¹³⁾。

以上の観察から、「3大学」はかなり周縁的なNQだと言うことができる。これは、(9A)の類に全般的に当てはまるようである。「大学」、もっと言えば(9A)がXである[数詞+X]がNQではないと主張しないのは、(22b, c)のようにNCQ型が適格になる場合があるからである。

最後に(9B)について。成田(1990:5)は、(18)の「ロハニいずれの用法も使いにくい」と言う。確かにその通りである。したがって、(9B)がXである[数詞+X]は、NQではないことになり、(18イ)のQの位置には現れるから名詞だということになる。

4. 数詞数量詞の定義とその帰結

以上、前節まで論じたNQについての定義をまとめて示す。

- (24) a. NQは任意の数詞に助数詞が直接後続して構成される
- b. NQは、名詞1語から成る被計量詞をとる
- c. Nが被計量詞、Cが格助詞であるとき、QノNC型とNCQ型のQの位置に現れる
 [数詞+X]はNQである
- d. NQを構成する助数詞とNQの被計量詞は同じ形態ではないのが一般的である

(24)について2点述べておきたい。まず、(24a)に「任意の」とあるのは、NQは計量表現だからである。計量表現を構成する数詞は任意でなければならない。「三筆」「三蹟」「三名瀑」や「七福神」、そして田中(2012:122)が挙げる「七不思議」「三銃士」などは数詞が固定されているからNQではない。

次に、(24d)に「一般的である」とあるのは、成田が挙げる次のような例の存在による。

- (25) {千票の票を／票千票を／票を千票} 集める (成田1990:5, (9)-(11))

(25)の「票」は(9Da)の例である。(25)では、「千票」の助数詞「票」と、被計量詞の「票」が同じ形態であるが、「千票」はNQである。さらに、典型的な助数詞から成るNQでもこのような例が作れるものがある。

- (26) {5人の人が／人が5人} 行方不明だ

但し、(26)で2カ所にある「人」は、助数詞は音読みだが被計量詞は訓読みだという違いはある。これは、(26)が、音形という点で(24d)に従っているということである。

本節の最後に、3節で挙げた、NCQ型は適格だがQノNC型は不適格になる例を(24)がどう説明するかについて、不十分ではあるが現段階で言えることを述べておきたい。(11)は(9Da)の例であり、(13)は(9Db)の例、そして(17)は(9Da)の例であった。(17c')は成田(1990)の例であるが判定は筆者のものである。

- | | |
|---------------------|-------------------|
| (11) c. 寿司の皿が2さらある | c'. *2さらの寿司の皿がある |
| (13) c. 何かの粒が2つぶ落ちた | c'. *2つぶの何かの粒が落ちた |
| (17) c. 注文の品を2しな届ける | c'. *2しなの注文の品を届ける |

これらは (24d) を満たしているが、QノNC型が不適格である。(11)・(13)・(17) のc' が不適格であるのは、“Qノ”と“NC”が修飾句で隔てられているからではない。典型的な助数詞から構成されたNQの場合はこのような例でも問題なく適格になるからである。

- (27) a. 2頭の和歌山生まれのパンダが元気だ
 b. 5台の真っ赤なSUVが速度超過で捕まった

しかし、(11)・(13)・(17) のc' と (27a, b) を同等に扱ってはならない。前者で (27) に対応する例を作るとしたら次のようなものである。

- (28) a. 食卓には2さらのおいしそうなパスタがあった
 b. 2つぶの真っ白な米が落ちた
 c. ? 2しなのお礼の贈り物を届ける

(28) の適格性は、(11)・(13)・(17) の下線部がNQであることをさらに支持する。典型的なNQである (27) の「2頭」と「5台」は、それらの助数詞と同形態の名詞が主要部となる名詞句を被計量詞としてとることは絶対でない、すなわち、助数詞としての「頭(とう)」と「台(だい)」は、それぞれ「頭(あたま)」、「台(だい)」を計数するNQを構成しないため、(11)・(13)・(17) のcとc' のような例がつかれないのである。

(11)・(13)・(17) のcが適格でc' が不適格である理由は、完全には説明することができないが、(24d) が、何らかの理由で、NCQ型よりもQノNC型に強く適用されることによる、つまり、QノNC型では、被計量詞の主要部にXと同じ形態が現れてはならないという制約があるのかもしれない。1つの記述の可能性として指摘しておこう。このように考えると、(11)・(13)・(17) のc' と、(28a) - (28c) との間の適格性の違いも、同様に説明することができる。

NCQ型は適格だがQノNC型は不適格になるということの関連で言うと、(9A) の例がXである[数詞+X]は、被計量詞をとらずに副詞的な位置で使うことができる点が注目される。

- (29) a. A大学の工学部は7学科ある
 b. 今年の父母会は3会場減らした
 c. あと14(文)字削れば指定字数に収まる
 d. 今年の父母会は昨年より3会場多い

このような例は、述語が、(29b) – (29d)のように数量の差を表すものである場合に作りやすい。これらの述語は、被計量詞をとるものも含めて副詞的なNQと共起しやすいためである（北原1994）。次の例は被計量詞をとっているNQの例である。

- (30) a. 今年は昨年よりも入学者が15人 {増えた／多い}
 b. *今年は昨年よりも15人の入学者が {増えた／多い}

しかし、(29a)のような例もあるため、数量の差を表す文脈でのみ観察されることだと一般化することはできない。あるいは、(29a)と(29b) – (29d)は別に論しなければならない可能性もある。

5. おわりに

本論文で提案したNQの定義である(24)を再掲する。

- (24) a. NQは任意の数詞に助数詞が直接後続して構成される
 b. NQは、名詞1語から成る被計量詞をとる
 c. Nが被計量詞、Cが格助詞であるとき、QノNC型とNCQ型のQの位置に現れる
 [数詞+X]はNQである
 d. NQを構成する助数詞とNQの被計量詞は同じ形態ではないのが一般的である

本論文では計数を意味する表現を扱ったため、内容数量詞についてはほとんど述べていないが、(24)は内容数量詞にも当てはまる。

本論文では、いわゆるプロトタイプ論的な見方を採り、NQには原型的、典型的な例から周辺的な例までであるというように考えた。言い方を変えれば、(24)に挙げた4条件をどれだけ満たすかで、助数詞らしさが決まるということである。これら4条件の中でも重要性に違いがあると考えなければならない可能性もあろう。

ただ、(24a, d)の言明の中にある「助数詞」が気にはなる。これを定義しなければ、特に成田(1990)の分類である(9B)が助数詞ではなく名詞だと断言することはできない。本論文の中でも助数詞については多少触れてはきたが、今後は、助数詞の分類として、類別-計数詞、計測詞、そしてその他の下位類を考え、助数詞の体系を明らかにしてゆきたい¹⁴⁾。実は本論文では、(9C, D)の例が類別-計数詞であるかどうか論じていない。さらに、日本語に、英語の可算名詞句と同様の構造を成す名詞句があるのかどうかも考えなければならない。これについても、[数詞+X]のXの助数詞性あるいは名詞性を考えなければならない。助数詞か名詞か、という問題を、山森(2006)は名詞の意味論的な性質から接近しているが、日本語(学)

でこの種の接近法を採る先行研究は少ない。助数詞の定義には、名詞（句）側からの接近も必要である。

注

- 1) 「リンゴを15, ミカンを30用意した」のように数詞のみで使える場合もあるが、このような用法はかなり限られた文脈でのみ可能である。
- 2) Aikhenvald (2003:122) が挙げる“Distribution of numeral classifiers in the languages of the world”の地図には、数量類別詞(numeral classifier)をもつ言語の使用地域には斜線が引かれている。しかし、水口(2004:7, fn5)も指摘するように、日本列島には斜線が引かれていない。勿論これは誤りである。なお、数量類別詞とは、正確には、2.2で述べる、助数詞の下位類である類別-計数詞を言う。
- 3) (2)-(4)では、英語の1通りの表現が日本語では3通りの表現に対応している。これは、英語の数詞は常に名詞の前に置かれるのに対し、日本語のNQは(少なくとも)(2)-(4)に挙げた3種類の位置に現れうるという統語的な違いによる。
- 4) 正確に言えば、2節で述べる、助数詞の下位類である類別-計数詞である。
- 5) 英語で書かれた、特に統語論の文献では、被計量詞を“host NP”と言うことが多い。被計量詞とNQのどちらがどちらをhostしているのかは実は重要な問題である。
- 6) 計数は、形式意味論(Formal Semantics)で言われる原子性(atomicity)や量子性(quantizedness)(Link1983, Landman1989a, b, Krifka1989など)と関係する。
- 7) 助数詞の下位類には、類別-計数詞と計測詞以外のものもある。助数詞(的なもの)の分類については、他の言語でのそれも含めて、一方の極に類別-計数詞(的なもの)を置き、他方の極に計測詞(的なもの)を置くという点では大凡の見解の一致を見ている。違いは両者の間にどのような分類を考えるかである。日本語については水口(2004)や影山他(2011)、眞野・米澤(2013)などを参照。筆者は、Kitahara(2018)を修正した分類を別稿として準備している。
- 8) 1メートル単位, 1リットル単位で売買する「メートル売り」や「リットル買い」、また計量対象の計測値の表示方法として「(センチメートルでなく)メートルで表す」などとは言える。しかし、これらは、どういう単位かが問題になる文脈で用いられた例であることに注意したい。
- 9) (9)の中にはたとえば「町内」, 「図形」などのように、数詞が前接すると、筆者には不自然あるいは不適格と思われるものもいくつかある。
- 10) “/”は、成田(1990)で「組織ないし集団」の下位類とされている境界を示しているが、この区分は本論文の議論とは関係しない。
- 11) Xが(9C, D)の例である[数詞+X]は、数詞がXの指示対象の数も表すと言える(Kitahara2018)ため、「も」を入れた。これについては、助数詞の体系とともに別稿で論じたい。
- 12) NCQ型が適格になるのは、C即ち格助詞が「が」か「を」である場合、あるいは、名詞句であるNCが主語か目的語である場合に偏ることはよく知られている。また、「本を図書館で七恵が3冊読んだ」のように、NCとQの間に下線で示したような句が挿入されても適格である場合もあるが、このような例もNCQ型に含めて考える。しかし、本論文のNCQ型の例文にはNCとQが隣接したもののみを挙げる。
- 13) (20c)と(22c)の「そのようなところ」を、「大学」の部分集合を意味するもの、たとえば「医科大学」や「女子大」にかえた例を見よう。
 - (i) ? {医科大学を3大学/女子大を3大学} 新設した
 - (ii) * {3大学の医科大学を/3大学の女子大を} 新設した
 (ii)のようにQノNC型は不適格であるし、(i)のようにNCQ型も少々不自然である。この事実も、

「3大学」がNQの周辺例であることを示す。

14) (24) はNQの定義であるから、(24b, c) はNQを構成する助数詞の定義でもあることになる。

引用文献

- Allan, Keith. (1977) Classifiers. *Language* 53(2) : 285-311
- Aikhenvald, Alexandra Y. (2003) *Classifiers: A Typology of Noun Categorization Device*, Oxford: Oxford University Press.
- Chierchia, Gennaro. (1999) Plurality of Mass Nouns and the Notion of Semantic Parameter. In Rothstein, Susan (ed.), *Events and Grammar*, Dordrecht: Kluwer, pp.53-103
- 影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之 (2011) 「名詞の数え方と類別」影山太郎編『日英対照名詞の意味と構文』大修館書店. 10-35.
- 神尾昭雄 (1977) 「数量詞のシンタックス〈日本語の変形をめぐる議論への一資料〉」『言語』6(9) : 83-91. 大修館書店.
- 北原博雄 (1994) 「数量詞の連用修飾機能—数量詞と先行詞の関係—」『文藝研究』137 : 63-72. 日本文藝研究会.
- 北原博雄 (1996) 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞—計量方法の二面性—」『国語学』186 : 63-76. 国語学会 (現日本語学会).
- 北原博雄 (1999) 「日本語動詞句の研究」博士学位論文 (東北大学).
- Kitahara, Hiroo. (2018) Aspects of 'Numeratives' in Japanese. *The 37th Joint International Conference of North East Asia and Cultural Exchange*, The Association of North-East Asian Cultures, The Association of Japanology in East Asia, and Humanities Korea Plus Research Group of PKNU-Asia Culture Institute, pp.115-121
- Krifka, Manfred. (1989) Nominal Reference, Temporal Construction and Quantification in Event Semantics. In Bartsch, R. et al. (eds.) *Semantics and Contextual Expression*, Dordrecht: Foris Publications, pp.75-115
- Landman, Fred. Groups, I. *Linguistics and Philosophy*, 12(5) Amsterdam: Springer, 1989a, pp.559-605
- Landman, Fred. Groups, II. *Linguistics and Philosophy*, 12(6) Amsterdam: Springer, 1989b, pp.723-744
- Link, Godehard. (1983) The Logical Analysis of Plurals and Mass Terms: A Lattice-theoretical Approach. In Bäuerle, R. et al. (eds.), *Meaning, Use and Interpretation of Language*, Berlin: de Gruyter, pp.302-323
- 眞野美穂・米澤優 (2013) 「生成語彙理論による助数詞の分析」『レキシコンフォーラムNo.6』ひつじ書房. 139-171.
- 水口志乃扶 (2004) 「『類別詞』とは何か」西光義弘・水口志乃扶編『類別詞の対照』くろしお出版. 3-22.
- 成田徹男 (1990) 「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27 : 1-8. 東京都立大学国語国文学会.
- 奥津敬一郎 (1969) 「数量的表現の文法」『日本語教育』14号 : 42-60. 日本語教育学会.
- 奥津敬一郎 (1983) 「数量詞移動再論」『人文学報』160 : 1-24. 東京都立大学人文学部.
- 田中佑 (2012) 「日本語助数詞の範囲—名詞と助数詞の連続性—」『筑波応用言語学研究』19 : 117-126. 筑波大学人文社会科学部研究科文芸・言語応用言語学領域.
- 田中佑 (2014) 「近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着」筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文.
- 山森良枝 (2006) 『日本語の限量表現の研究—量化と前提の諸相』風間書房.
- 矢澤真人 (1985) 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『国語国文論叢』23 : 96-112. 学

習院女子短期大学.

(きたはら ひろお)

On the Status of the Linguistic Expressions “[Numeral-X]” in Japanese

Hiroo KITAHARA

Abstract

In Japanese, a numeral quantifier consists of a numeral and a numerative (or an auxiliary numeral). For example, in “futa-tsu”, “futa” is a numeral and “tsu” is a numerative. In English, when counting entities denoted by a countable noun, we use only a numeral. “Two apples” is translated into “futa-tsu no ringo (*two*-NUMERATIVE LINKER *apple(s)*)”. In Japanese, however, in the same way as in English, we seem to count entities denoted by a noun, making use of only a numeral, such as “san-iin (*three-committees*)” and “nana-daigaku (*seven-colleges*)”. In this paper, we investigate whether these examples without adding a numerative are numeral quantifiers, and define the latter.

Keywords: numeral quantifier, numerative, classifier-counter, measurer, countable noun, uncountable noun, prototype